

## バンクーバーに住んで感じたことー卒業後からカナダ永住までー

宮崎 陽子 (保健学科5期生)

### 1. はじめに

私はカナダのバンクーバーで理学療法士ではなく、Behaviour Interventionist (以下: BI) として自閉の子ども達を支援しています。BIとはApplied Behavior Analysis (応用行動分析; 以下: ABA) の資格を有した専門家が作成した療育計画に基づいて、専門家監督のもと、実際にABAセラピーを行う者のことを指し、対象児の生活上の困難さやコミュニケーションスキルにアプローチする役割を担います。今回、海外に興味を持つ同門会員の皆様の参考になるように、卒業後からカナダ移住にいたる経緯やコロナ禍での生活についてお話したいと思います。

### 2. 海外へ興味を持ったきっかけ

中学3年生の時、地元の企画でニュージーランド研修に参加しました。人より多い数の羊や綺麗な青空に感動したのを覚えています。それから何となくではありますが海外に「行きたい」ではなく「住みたい」と思うようになりました。その後、大学生の時「ワーキングホリデー」の存在を知り、自分なりにインターネットで調べるようになりました。私たちが卒業する頃、中野治郎先生がカナダのブリティッシュコロンビア大学へ行くことになり、先生に「いつか海外に行きたい。」と話すと、先生は「行ったらいいよ。」と答えてくれました。今思えば、きっとそれが海外へ行くことを心に決めた瞬間だったように感じます。

### 3. いざ、カナダへ

大学卒業後、5年間勤めた病院を退職し、ワーキングホリデー制度を利用してカナダへと向かいました。私はミュージカルが英語で楽しめるようになることを留学の目標としました。しかし、現地で生活すると、私はカナダの福祉環境が気になりました。電車はプラットホームとの段差がなく、バスでは車椅子やベビーカーの人が乗ると、他の乗客は席を立ち、車椅子スペースの椅子をパタンと跳ね上げ、電車は自然と優先席が空きます(図1)。ごく自然に健常者と障害者が共生している光景をととても好ましく思いました。

また、カナダ英語というアクセントがなくきれいな英語、そんなイメージを持たれている方も多いと思います。実際に第一言語が英語の人はこれが当てはまります。しかし、移民大国のカナダでは、私も含め本当にいろんなアクセントの英語が飛び交い、受け入れられています。それは、逆に言うと、ありがたいことに私の日本語訛りの英語も聞きとってもらえているということになります。カナダに来たばかりの頃は、正しい英語を話さなければと必死でしたが、



図1. 低床バス(左)  
跳ね上げ式座席と車椅子スペース(右)

この多様性の文化と、通った語学学校の先生や友人の助言のおかげで、「話そう」という気持ちを全面に押し出すことができるようになり、私の英語力は向上していきました(図2)。もちろん英語だけではなく、多様な文化が受け入れられ、共存しています。例えば、世界一周できるのではないかと思えるほど様々な国のレストランがあり、スーパーマーケットではアジア系や日本では馴染みないハラールミート(イスラム教の戒律によって食べることが許された肉)を取り扱ったお店、イタリア系、インド系など様々なものがあり、移民大国であることがわかります。また、ジェンダーの多様性については、2005年からカナダ全土での同性婚が認められており、性的マイノリティの理解促進のためのPrideパレードには首相自身も参加されています。この多様性に溢れる文化は、流行を気にして洋服を買っていた私は「自分の好きな洋服を着ていいのか!」と、次第に私自身を解放し、居心地の良いものを感じるようになっていきました。

さて、カナダ滞在も残り少なくなった頃、私は帰国前の2ヶ月ほど、日本でいうデイサービスのようところでボランティアをしました。耳の遠いシニアさんと大き

な声で英語を話すのは、ごまかしがきかない試練となりましたが、シニアさんとの交流が楽しくて頑張っていると、ボランティアを終える頃には冗談まで言い合えるようになっていました。日本のデイケアで働いていた時に、運動療法などの制度に縛られた支援しかできなかった私には、この開放的な雰囲気は非常に印象的でした。この経験を活かしたいと、帰国後の就職活動をカナダで始め、帰国後は以前から興味があった発達障害を持つ子どもの支援関係の会社で働くことになりました。

#### 4. 再度カナダへ

日本で約1年半勤めた後、縁あってカナダに移住することになりました。移住後に出会った日本人の方に、カナダでも発達障害関係の仕事が続けたいという話をしたところ、現在のBIという仕事に繋がりました。永住権(選挙権がないこと以外はカナダ国籍保持者と同じ権利)の申請中は働くことができなかったため、しばらく日系のコミュニティセンターでボランティアをしていました。そのコミュニティセンターでは、日本語のデイサービスのようものを催しており、何度か参加する中で、そのコミュニティセンターの受付の仕事をするように



図2. 語学学校の友人



図3. コミュニティセンターの様子  
バザーでカナダ産の松茸を販売(左)  
たこ焼きの提供(右)

なりました（図3）。多くのシニアの方々と交流し、カナダで生活するための知識が増え、非常に充実した日々を過ごせるようになりました。仕事については「やりたい」という気持ちを伝えていったからこそ得られたものであり、新しいことにチャレンジすることへのハードルは、日本に居た頃と比べて、随分と低くなりました。

## 5. コロナ禍での過ごし方

2020年2月頃、日本で新型コロナと大騒ぎしていたころ、カナダでは対岸の火事、といった状況でしたが、3月に入ると一転し、外出自粛、緊急事態宣言と生活が急変しました。働いていたコミュニティセンターはしばらく閉館となり、私は解雇となりました。カナダ政府はコロナ失業者への対応も早く、日本がマスクの配付を議論している間に、コロナによる失業保険が給付されました。生活面では日本と同様に、カナダでもトイレットペーパーをはじめとする紙類や、ベーキング系の粉類が不足しました（図4）。文化的背景が異なるためマスクを着用する人は、日本と比べ圧倒的に少ないのですが、8月末より公共交通機関でのマスク着用が義務づけられ、外出制限は徐々に解かれていきました（図5）。バン



図4. 紙製品の不足が始まった頃の様子



図5. ソーシャルディスタンスingのため右側通行を促す駅の階段（左）マスク着用義務のポスター（右）

クーバーは秋から春にかけて雨が多く、非常に過ごしやすい時期となり、大勢で集まる若者が増えたことで感染者が増加し、新型コロナ感染者数は日本と同様に収束する見通しが立っていません。最近では密なイベント等、自粛規制に違反すると罰金まで取られるようになってしまいました。

## 6. 海外に興味をもつ後輩の皆さんへ

海外に少しでも興味があるのであれば、私は思い切って行くべきだと思います。いろんな人に出会い、違う環境に身を置くことで、自分を見つめ直す良い機会になりましたし、新しいことを始めるきっかけにもなりました。もちろん私も行く前は楽しみでもあり、不安でもありました。もし、興味はあるけれど迷っているという人がいれば「可能性しかない」という言葉をかけたいと思います。これは私がカナダで有効な資格を持っておらず、それでも何か人の役に立てる仕事がしたいと悩んでいた頃に職場の上司がかけてくれた言葉です。「何もないからこそ何者にでもなれる。可能性しかない。」という意味でいつも勇気づけられています。もし、皆さんの中に海外にチャレンジしてみたいと思う人がいれば、私は心の底から応援したいと思います。